

ふるさと蓋井のよさを感じ、自己の夢の実現に向けて
意欲的に取り組む子どもを育てるPTA活動
下関市立蓋井小学校

1 学校地域の概要

本校は、下関市吉母の北西約6kmの響灘に浮かぶ蓋井島にある、島唯一の学校施設である。

蓋井小学校のあるこの島は、周囲には険しい岩石海岸が続き、日本海の荒波で侵食された岩門と名付けられた洞窟など奇岩が多く見られる。また、周辺海域は、海流の影響もあり海産物の宝庫で、アワビ、サザエ、ウニなどの海の幸が豊富に水揚げされている。



山ノ神神事
神送りの儀式

蓋井島は、海上交通の要衝として、古くから九州や大陸方面との交流があり、島の地名や伝説の中にもこれを伝えるものが多く残されてる。島の伝統行事として、「山ノ神」の森で7年目ごとに催される「山ノ神神事」(巳年と辰年に開催)は、市の無形民俗文化財に指定されており、我が国古来の神事の型を伝えるものとして、非常に貴重なものとされている。この「山ノ神神事」は、11月の下旬に3日間にわたって行われ、この期間中は多くの観光客が島を訪れ、古来の仕来りに則ったこの伝統行事を厳かに見守っている。

蓋井島灯台と響灘に沈む夕日

右の写真の高台にある灯台は、昭和26年に日本で初めて風力発電が導入された灯台として知られている。発電には直径約9mの風車が使用されていた。現在では、電源は商用電力に切り替えられているが、風車を取り付けてあった鉄塔は、今も無線中継用鉄塔として活用されている。灯台のある高台からは、響灘が一望の下に見渡せ、水平線に沈む夕日は絶景である。



蓋井島の由来であるが、「蓋井島の水の明神の場所に井戸があり、一つは水の池、一つは火の池といわれ、神功皇后三韓征伐の時、水の在所を敵に見られないよう、又火の

池の蓋をあけると大火事になるので、二つの池(井戸)に蓋をしたことから『二井島』『ふたおい島』そして『蓋井島』とも呼ばれるようになった。」という伝説があり、主として蓋井島の字が今日迄伝えられている。さらには、神功皇后の伝説に由来した地名も多く残っている。

「見付けの瀬」

神功皇后が宗像三女神に先勝祈願した後、帰りにこの島を見つけたことから

「鞠の庭」

神功皇后が蹴鞠遊びをされたことから

「乞月山」

その蹴鞠の最中に日が暮れたので、山で月を乞われたことから

「幕の紋」、「酒の瀬」

皇后が宴を催されたことから

など、まだまだたくさん島の中には由来する名前が残されている。



蓋井小学校

現在蓋井小学校は、児童数3名(家庭数2戸)の児童が在籍している。1・2年生の複式学級と6年生1人の単学級の、2学級で構成されている。児童数が多かった頃は、約40名程の児童が通学していたが、この10年間は1桁台の児童数になっている。しかし、ここ数年、島に帰ってくる若者が増えるとともに世帯数も増え、併せて6歳以下の幼児も年々増えてきている。4・5年後には、再び複式ではあるが3学級編成となる見込みであり、今以上に活気のある小学校になるのではと、島民も期待している。また、明治初頭から学校が開設されていることから、島の方々の学校に寄せる期待は大きく、島の一つのコミュニティーとしての役割を学校自体が担っている。コミュニティーとしての中核となる学校への期待感、PTA活動や学校の諸行事に対して、大変協力的で人情味あふれる気持ちが代々継承されている。まさに、蓋井小学校は島の方々に支えられた学校であるといえる。

今後も、児童1人ひとりの「豊かな心の育成」のため、そして「自己の夢の実現」のために、学校としても学校行事や島の行事をとおして、長く深い関わりを継続しながら、PTA活動、学校教育活動を推し進めていきたいと考えている。



2 P T A組織

役員名	氏 名	備 考
会 長	藤 永 照 彦	総務・緑の少年隊担当
副 会 長	藤 永 恵 美	総務
副 会 長	植 木 誠	総務
副 会 長	植 木 聡 子	総務
施 設 部	藤 永 照 彦	施設修理・草刈り等
学校外活動部	藤 永 恵 美	釣り魚大会、門松づくり、竹切りなど
文 化 部	藤 永 照 彦	学芸会担当
保 体 部	藤 永 照 彦	キャンプ
監 査	藤 永 恵 美	子ども会・会計
顧 問	中 村 求	自治会長
	倉 本 武 志	前 P T A 会長

事務局（校長）

庶 務	校長 片山伸二	会の記録、文書の発送、庶務
	養護士 相良恵利佳	
会 計	校長 片山伸二	会の経理

3 研修主題

「ふるさと蓋井のよさを感じ、自己の夢の実現に向けて
意欲的に取り組むこどもを育てる P T A 活動」

(サブテーマ)

豊かな自然に囲まれた立地条件を生かした

様々な体験活動をとおして豊かな心の育成と生きる力を育む

- 児童が3人の極小規模校である本校では、児童相互の関係づくりがなかなか難しく、社会性を高めるために交流学习や総合的な学習の時間をとおして、様々なふれあい活動を行ってきている。本年は、これまでの実践をふまえた上、ふるさと蓋井と自分自身を見つめ直す活動から、自己の夢の実現に向けより豊かな心の育成と未来を生き抜く力の育成、意欲的に取り組むたくましい実践力を身につけさせたいと考え、研究主題を設定した。

4 研修計画

- 漁体験－実際に蓋井島で採れる海産物を磯から漁の体験(6月下旬)
蓋井島の周りでの定置網掛けの方法と実際の漁の体験(10月中旬)
- 対岸にある小学校との交流活動をとおしてコミュニケーション能力の育成
(年間15回程度)
- 自然豊かな島に様々な野鳥が生息していることの観測(バードウォッチング)
- 島のおられる陶芸家の方を講師に陶芸教室の開催

5 活動内容

(1) 米づくり体験

○ ねらい

- ・ 島での米づくり体験をすることで、厳しい自然の中で生活する島の方々の苦労と工夫を感じ取る。

(田植え)



- ・ 機械ではなく、手による田植え
- ・ 「なかなかうまく植えられないよう」という声が、子どもたちの中から聞こえて来ました



- ・ まっすぐ植えたつもりが……。
- ・ 足がなかなか抜けず、田んぼの中へ見事着地！

(稲刈り)



- ・ 稲刈りも鎌を使いました。
- ・ 今年も大きく育ったなあ！でも、台風が近づいているから少し早めの稲刈りでした。

- ・ 細かった苗もこんなに株別れして大きく育ちました。
- ・ 米も作るし、魚も捕る。
島の人たちは、いつゆっくりと休むんだろう？



(2) ウニ捕りー塩ウニづくり



- ・ 6月といっても、海水温はまだまだ低く、寒い中がんばってウニを取りました。
- ・ 島の人たちは、この冷たい海の中1日中ウニを捕っているなんて、すごい。

① 採ってきたウニの殻を破って中身を出します。



② 中から取り出したウニを塩水で洗い、同じ大きさに分けます。



③ 同じ大きさのウニを形を壊さないように丁寧に瓶に入れます。



④ 瓶の中身はだいたい75gです。



○ 磯見の漁は、6月の大潮の時期に行われます。6月といっても、陸の上とは違い随分と海水は冷たく、手もかじかんでなかなかうまく採れませんでした。自然の厳しさと豊かな自然の幸に触れた体験でした。

(3) 交流学习（吉見小・吉母小・蓋井小ー三校交流学习）

○ 砂の造形コンテスト

（ねらい）

- ・ 集会をとおして、異学年交流や吉母小・蓋井小・吉見小3校の児童の交流を深める。
- ・ 吉見地区の自然のよさを再発見し、そのよさを守り続けようとする実践的態度を養う。
- ・ 造形活動をわんぱく班で行うことをとおして、協力的な態度を養う。



- ・ 蓋井島では、砂地の海岸がないため、砂での造形は、なかなか行うことができません。この日は、たくさんの友達と協力してすてきな砂の造形を作りました。

- ・ 広々とした砂浜は、思いっきり走っても、思いっきりこけても大丈夫！
きょうは、わんぱく班のお友達といっしょで、心も弾む思いでした。



- ・ 近くで見ても、よく全体像が湧きません。だいたいこの辺りを今作っているんだけど？と思いつつ、みんなで相談しながら、完成までがんばろう！



(4) 陶芸教室

(ねらい)

- ・ 島に在住しておられる陶芸家の方をお呼びして、島で採れる土を使った陶芸づくりをすることで、ふるさと蓋井を見直す機会とする。



初めての陶芸づくりにチャレンジ！
まずは、市販の年度と島の土を混ぜて、こねるところから始めました。



自分の好きな絵を描いたり、家でつかいたものをいろいろと工夫しながら、作りました。さて、うまく焼けたのかな？



どの子も、初めてのチェンジで、腕が痛いとかうまくロクロが回らないとか、色々と言いながら楽しく作品作りをすることができました。

見事焼き上げた作品は

ハイ！このとおり！

一つの作品にも、たくさんの人の手が入っていることを感じ取ったようでした。

(5) エミューの卵を使って
(ねらい)

- ・ 島で飼育されている、エミューの無精卵を使って、おいしいエミューぷりんを作ろう。



一つ長さ15cm 重さ600gの大きな卵



見たこともない黄身の大きさにびっくり！



大きな黄身を混ぜ合わせるのは一苦労！
腕が痛くなったようでした。



上手にカップに振り分けられるかな？



ここは、巨大プリン！に挑戦！



エミューの卵1つからは、およそ20人分程のプリンができました。味は抜群でした！

6 成果と課題

(1) 成果

- 豊かな自然に恵まれたこの蓋井島において、子どもたちにふるさつを見つめ直し、よさを再確認する取組みは、これまでの活動以外にないのだろうか？ということから、本年度はこれまで継続して取組んできた「大好きふるさと体験活動」へ、より蓋井島の特性を生かした活動を取り入れてみた。



活動内容にあげた「田植え・米づくり」や「ウニ捕り・塩ウニづくり」、近隣にある小学校（吉見小・吉母小）との交流学习は、これまでも長年にわたって取組んできた。これまで取組んできた活動については、よりねらいを明確にし“子どもたちに何を学ばせ何を感じ取らせるか”に重点を置き、活動に取組んだ。

- ・ 「田植え・米づくり」においては、単に苗を植え、米ができるという過程を学ぶだけでなく、どうして島の中ではほとんどの家で米づくりをしているのかという観点から、島の方々の生活について考えさせた。離島である蓋井島の自然の厳しさと、水資源の乏しいことを考えると、米づくりにはあまり適していない土地柄でありながら、長年自然と対面しつつ自らの豊かな生活を確保するために、日々苦労を重ねてこられた島の方々の努力を感じ取ってくれたようであった。
 - ・ 「ウニ捕り・塩ウニづくり」では、一瓶あたり75g入っている生ウニをどのようにして加工し、製品として出荷しているのかという背景に、島の恵まれた自然を守り続けていこうとする、島の方々の自然を愛する心と環境保全への努力を感じることができた。
 - ・ 極小規模校である本校児童の社会性と自己表現力、コミュニケーション能力を育むことをめざして、近隣の小学校（吉見小・吉母小）との交流学习を、積極的に行ってきた。本年度は、子どもたちにつけたい3つの力とともに、交流学习で学んだことどう生かしていくかということをもめあてに取組んだ。集団生活の交流にとどまらず、活動内容にあげた「砂の造形コンテスト」では、保護者にも参観をお願いし、集団における児童の活動の様子を見ていただいた。集団の中でこそ味わえる達成感や充実感を子どもたちだけでなく、保護者の方も感じ取っていただいた。
- これまで行ってきた活動の他に、本年度は、「陶芸教室」と島で飼育されているエミューの卵を使った「エミュープリン作り」を行った。



- ・ 陶芸教室は、島に在住しておられる陶芸家の方に来ていただき、制作に取り組んだ。一つひとつの器にも、制作する人の思いや願いが込められていることが感じ取ることができたとともに、島の赤土と市販の粘土を混ぜ合わせることにより、蓋井島ならではの色合いと味わいがかもち出されることを学んだ。

- ・ 「エミュープリン作り」では、島興しのために飼育されているエミューの無精卵をいただきプリン作りをした。卵から取り出した黄身のあまりもの大きさに、児童だけでなく職員も保護者も目を丸くしていた。市販されているプリント違った手作りのプリンがうまく出来上がるか、子どもたちは心配していたが、実際出来上がったエミュープリンを試食してみると、日頃食べ慣れているプリン以上の味わいがあり、思わず舌鼓を打っていた。エミューの卵を寄贈していただいた自治会長さんや関係者の方々にも試食していただいたが、どの方もとてもおいしかったと大好評であった。

「陶芸教室」と「エミュープリン作り」という島の特性を生かした活動を取り入れたことで、子どもたちは蓋井島のよさをよりいそおうかんじとったようであった。

(2) 課題

様々な活動をとおして、子どもたちはふるさと蓋井のよさをさらに再発見し、意欲的に交流学习や物づくり、自然体験活動などに取組んでいた。本年度は、新しい内容を取り入れることで、子どもたちは、学校においても地域においても意欲的に活動に取り組もうとする態度が育ってきた。しかしその反面、近隣との交流学习の中では、他校と合同のグループ活動において、一緒にグループの人たちと協力していこうというより、困ったことがあると蓋井小の担任に頼ろうとする態度が時折見受けられ、「社会性」「自己表現力」そして「コミュニケーション能力」をどう育んでいくかが、課題として浮き上がってきた。子どもたちの自らの夢の実現のためには、「社会性」「自己表現力」そして「コミュニケーション能力」は大切なものである。今ここで体験している活動は、これまで自分たちが学んできたこととどう繋がり、どのように活用していけばいいのかを、活動後の振り返りの時間に、しっかりと見つめる時間が必要である。この振り返りの時間をしっかりと押さえることが、自己の夢の実現させるために必要な生きる力として、育んでいけるのではないだろうか。

次年度は、再び複式であるが単学級編成(2・3年生性の複式学級)になり、職員も減ることから、これまで行ってきた活動の見直しと、本年度の課題を見据えた方策をしっかりと立て、子どもたちの夢の実現に向け、様々な活動



蓋井島に沈む夕日

をとおして取組んでいきたい。島に在住し、やがてこの蓋井小学校に入学してくる幼児8名のためにも、子どもたち一人ひとりの自己の夢の実現に向け「社会性」「自己表現力」そして「コミュニケーション能力」を育むことを目標にし、家庭・地域・学校とがより連携を図りながら、PTA活動を推進していきたい。